

幼児の「身体表現」の指導について ― 保育園での実践を通して ― V

保育者のことばかけと身体表現

藤 善 瑞 子

I. はじめに

幼児は生活や遊びの中で経験したことが、イメージとして心の中に蓄えられファイルされる。成長するとともに、ファイルは刻々とその数と厚みを増していく。表現とは、ファイルから必要なイメージを取り出して、それを再現することによって他に伝達することに他ならないと考えられる。1歳に満たない子どもが「イナイイナイバア」で笑ったり、「イイ顔イイ顔」と言われて特上の笑顔をつくったりする動作は、既に乳児期から、大人の動作や反応をイメージし表現していることの現れであると言えよう。乳幼児の豊かな表現はこのような周囲の大人の関わりから出発し、自然環境をはじめとする物的・人的な環境が、その生成に重要であることは論を待たない。

保育という営みは、保育者が意図的に働きかけて行われる豊かな生活やあそび体験を通して、乳幼児が見る・聞く・触る・嗅ぐ・味わうなどの五感全部で、身体の隅々にまで情報をインプットし蓄えていく活動と、保育者の導きによってそれを機にに応じて取り出して使いこなし、またそこに新たな情報をインプットしていく活動のくりかえしであるといえよう。それは保育のあらゆる場面で見られることであるが、身体表現の活動で見てみると、保育者とともに生活や遊びの中で体験したことがイメージとして蓄えられ、それが保育者の働きかけにより豊かな身体表現となって再現されていることがうかがえる。ここ数年継続している本研究から、発達段階によってその活動内容に違いが見られる。2歳～3歳においては、実際の遊びや生活体験の模倣が主として再現される。例えば、クマになって四つん這いで動くところはクマをイメージしているのだが、食べたり、寝たり、かくれんぼをしたりなどは自分の生活・あそび体験を再現する。4歳以降になると、模倣するものの特徴や生活（生きていく術とでも言おうか）をしっかり学び、それを自分の蓄えてきたイメージを駆使して自分の動きで表現していくようになる。また、保育者との関わりにおいては、0・1歳児の時期には、もっぱら保育者の動きを模倣する。模倣することで運動感覚を通してイメージをファイルしている時期ととらえることができるであろう。2・3歳児になると、保育者の模倣をしながらも友達の動きも認識し始め、友達と保育者と動きを共有し一緒に動くのがとても楽しい様子がうかがえる。動きの社会化とでも言うべき時期であろう。4・5歳になると、もう保育者の模倣は影をひそめ、もっぱら自分の五感を通して蓄えたイメージで自分の動きを行う。それを保育者や友達に認められるのをとても喜ぶ、表現の自立の時期とでも言えようか。さらに、表現を助ける物との関わりについてしてみると、2・3歳児の場合は、「みたて」や「つもり」の盛んな時期なので、物を媒介にしてイメージが形成されやすい場合も多く、例えば隠れることができる草や葉があった方が表現が楽しく豊かになる場面が多く見られる。それに対して、4・5歳児になると、物

はかえってイメージ形成の邪魔になることが多くなる。どのような場合にどのような物が表現を深めていくのに必要かは、よく考えられなければならないであろう。以上のような、身体表現の発達の様子や保育者との関わりについては、既に本学紀要第30号 p. 11「幼児の身体表現の指導について―保育園での実践を通して―Ⅱ 3歳児の身体表現からの考察」及び同31号 p. 63「同Ⅲ 2歳児の身体表現と保育者の関わり」及び同32号 p. 1「同Ⅳ 5歳児の身体表現とイメージの育ち」で論述しているので参照してほしい。

さて、身体表現の保育活動は、蓄えられているイメージを身体の動きで表現していく活動である。その際のイメージを引き出す手段は、保育者のことばである。一般的に、あることばを聞いて何をイメージするかは、万人に共通するものもあれば人それぞれで異なるものもある。それは、その人の体験からファイルされているものが、共通であったり異なったりするからであると考えられる。保育の場で保育者が幼児に語ることは、保育者が子どもたちと遊びを共有してこそ、共通の思いで響きあうものである。その意味で、わくわくドキドキした遊びの共感を数多く持っていること（ある意味で保育者は遊びのリーダーや仕掛け人的役割を持つこと）が共通のイメージを育て、身体表現を引き出す重要なポイントとなることは、前述の既出本学紀要の研究で報告した。今回、実際の保育場面における幼児へのことばかけと幼児の動きの関わりについて、若干の知見を得たので報告したい。

Ⅱ. 研究の目的と方法

身体表現活動においては、保育者のことばかけによって幼児はイメージを浮かべて身体の動きで表現する。その際に、どのようなことばを使うかによって、動きが容易に引き出されたり、逆に保育者の意図に反する動きが見られる場合もあるように思われる。保育実践における保育者のことばを分析することにより、身体表現に適することばの機能について検討を加えたい。発達段階としては、ことばによる身体表現が容易となる4歳児を取り上げた。

対象とした保育園：奈良県S郡K町私立T保育園

対象とした保育実践：4歳児クラス ばら組（男児10名・女児5名）

保育者 T.H. A.T.（障害児担当）

実践日時：2000年5月18日 a m10:30～10:54

観察と記録はビデオカメラで行い、保育者のことばと幼児の動きの経過をビデオから記録した。実践の全体の流れを示す当日の保育案は次のようである。

（保育案）

ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・身近にいる生き物に興味を持ち、体で表現することを楽しむ。 ・自分の思いを周りに伝えようとする。 ・リズムにのって体を動かす楽しさを味わう。 	
時刻	予想される幼児の活動	保育士の配慮
10:30	◎歌「くさいっぱん」	・姿勢よく、明るい声で歌えていることを認める。

<p>10:55</p> <p>11:00</p>	<p>◎表現「ちょうちょ」</p> <p>○毛虫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おいしい葉を探し食べる ・木に登る・おりる ・小鳥に見つかりじっとする <p>○青虫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おいしい葉を探して食べる ・ハチにおそわれ、くさい臭いを出し身を守る <p>○さなぎ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・安全な場所を見つけてさなぎになる <p>○ちょうちょ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・花畑へ飛んでいく ・甘いみつを探し飲む ・羽を休める <p>○「かえる」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・跳ぶ（高く、前に、回転等） ・えものをねらい食べる ・池で泳ぐ ・ヘビからかくれる <p>◎表現「たんぱぽ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・わた毛になり飛ぶ（見合いっこ） <p>◎仲良し遊び</p> <p>「みなさん 何ですか」</p> <p>◎わらべうた遊び</p> <p>「お寺のおしょうさん」</p> <p>◎フォークダンス</p> <p>「アルプス一万尺」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実際に見た時の様子を話して、イメージをふくらませる。 ・ 葉っぱを食べて、体が大きくなっていくことを認める。 ・ どうやって敵から身を守るのか、問いかけていく。 ・ 個々の様子を他児にもわかりやすく知らせていく。 ・ 「何味のみつかなあ？」「どんな花に止まっているの？」など、話をし、子どもの思いを聞き入れる。 ・ えものをねらい、そーっと近づく動きを楽しむ。 ・ 保育士と一緒にヘビになってもよい事を伝える。 ・ わた毛の感触を思い出してから、表現に入る。 ・ できるようになった事、楽しんでいる動きをとり入れる。 ・ 2人組になったら座っていくように、声をかける。 ・ 触れ合う中で、友達との関わりを大切にしていく。 ・ 歌いながら自然に円になっていく。 ・ 「トントン、○○」の部分は、次にしたい事をタイミングよく伝える。
---------------------------	--	--

今回は、上記の保育案による保育実践の中で、10時31分から43分まで行われた表現活動「ちょうちょ」の部分の12分間を取り上げて分析を行った。

Ⅲ. 分析カテゴリーの想定

一般的に、授業研究では教師の発言（自発的発言・応答的発言）と生徒の発言（応答的発言・自発的発言）を取り上げ、言語分析をすることによって授業方法を検討することがよく行われる。幼児の保育を対象にしたこういった言語分析の研究は数少ないが、ここでは、三宅茂夫・田中亨胤による「保育におけるコミュニケーション生成の改善—誘因としての保育者の“ことばがけ”—」を参考にした。この研究では、造形活動の保育における保育者発言と幼児発言を、「応答」と「自発」に分けて言語カテゴリーを想定している。保育者発言の言語カテゴリーは、「応答」では（感情を受け入れる）（ほめる・あるいは励ます）（幼児の考えを受け入れる・あるいは用いる）（幼児の質問や呼びかけに対しての単純

な応答）（質問する）であり、「自発」では（説明する）（指示を与える）（示唆を与える）（幼児を批評する・あるいは自分の権威を正当化する）に分けられている。保育者と幼児相互の言語発現の様相をこれらの言語カテゴリーに分類して、その内容から幼児の造形活動の保育における言語生成の過程を分析し、幼児のコミュニケーションの生成を促すよい保育者の“ことばがけ”の条件を考察している。¹⁾

本研究においては、身体表現を引き出すことばかけを研究対象としており、それは今までの研究からイメージを引き出すことがポイントであると考えている。その観点から、保育者のことばかけに応じた幼児の反応や動きをビデオから読み取って、そのことばがどういう働きをしたかによって、本研究では次のような言語カテゴリーを想定して保育者のことばを分類し、検討を試みた。

	保育者のことばの働き	言語カテゴリー
[1]	イメージを浮かばせる	イメージを想起することば
[2]	浮かべたイメージを動きにする	イメージを動きに誘うことば
[3]	幼児と一緒に動いて共感する	イメージや動きを共有することば
[4]	幼児の気持ちや考えや動きを受け入れる	イメージや動きを認めることば

IV 結果とその考察

表1は、保育者のことばかけと動き、それに対応する幼児の動きとことばを、逐次記録したものである。保育の流れに従って、（1）毛虫の話をする （2）毛虫になる （3）隠れる （4）青虫になる （5）さなぎになる （6）ちょうになる の6場面に分け、発語順に番号を付けてあらわした。保育者のことばは前述の言語カテゴリーに分類して表示した（番号の横）。カテゴリーは表中には略語を使用し、〔1〕はイメージを想起することばで略語（イ）、以下〔2〕はイメージを動きに誘うことば略語（動）、〔3〕はイメージや動きを共有することばで略語（共）、〔4〕はイメージや動きを認めることば略語（認）であらわした。（個）（グループ）は特に個人もしくはグループにことばをかけている場合に加えた。

表2は、各場面で保育者がどのようなカテゴリーの発語をしているかを把握するために、保育者のことばを言語カテゴリー毎に発語順に並べたものである。

表1・表2から、言語カテゴリーを視点にして、身体表現活動を分析してみたい。

1、言語カテゴリーからみた身体表現活動（表2）

表2から、各場面ごとで発せられていることばを言語カテゴリーでみると、まずイメージを想起することば（イ）があり、次いで動きへ誘うことばかけ（動）があり、その後に幼児とイメージや動きを共有したり（共）認めることば（認）を発して活動を進めていくというパターン（イ→動→共・認）がどの場面にも共通してみられる。（（1）の場面の毛虫の話はイメージ想起のことばが殆どであるが、この場面は全体の導入部分であると同時に、（2）の場面のイメージ想起の役割を果たしていると思われるので（1）と（2）は繋いで考えたい。）これは、身体表現活動の保育におけることばかけの特徴といえるであろう。

1) 三宅茂夫・田中亨胤「保育におけるコミュニケーション生成の改善 ― 誘因としての保育者の“ことばがけ” ―」 日本保育学会「保育学研究」第39巻第2号 2001 p.49

表1 保育逐語録（保育者のことばと幼児の動き）

場面	（言語カテゴリー） 保育者のことばと動き （ ）内は動き	幼児の動きとことば 「 」内はことば
(1) 毛虫の話をする	① (I) これ、何に食べられたか知ってる？（穴のあいた葉を見せながら）	<p>・先生の前に、横一列に並んで座っている。</p> <p>「青虫！」</p> <p>・口々に「青虫」と答える。</p> <p>・「チクチク。」「毛はえてる。」</p> <p>・首を横にふって「うん。」</p> <p>・T君「お腹いっぱいやねん。」</p> <p>・T君うなずいて「うん。」</p>
	② (認) よく知ってるなあ。	
	③ (認) これも（もうひとつの葉を見せる）。そやなあ。	
	④ (I) こっちゃんかこんな穴だらけ。H先生のほら、こっちゃんから見えるぐらい穴があいてるよ。	
	⑤ (I) ほら、こっちゃんもこんな（葉を見せて）なあ、いっぱい穴のあいてる葉っぱがあって、横にいっぱい毛が生えてる毛虫がじっとしてたの。でも、からだどなんやったっけ？	
	⑥ (認) チクチク生えた。当たり前！	
	⑦ (I) 触ろうとしたら、毒で指ギヤって刺すから、触らん方がええねんなあ。だからH先生も触らなかつたん。	
	⑧ (認) ひとつ不思議に思ったのは、ほら、この葉っぱよく見て。食べられてる？（葉を見せながら）	
	⑨ (I) 食べられてないなあ。	
	⑩ (I) 葉っぱ、においかいでみて？においは一緒やなあ。（食べられてる方と食べられていない方のおいを嗅ぎ比べながら）	
(2) 毛虫になる	⑪ (共) 何でこっちは食べられてんのに、こっちは食べられてないんやろ？	<p>・「小さくなり低い姿勢で這ったり、腹ばいで足を伸ばして這う。」</p> <p>・「両手を口のところにあてて、食べる振りをする。」</p> <p>・「初めは集まっているが、そのうち、思い思いのところへ探しに行く。」</p> <p>・「葉っぱを見つけた」と口々に言いながら、移動しては食べる振りをする。</p> <p>・「先生、さくらの葉っぱ見つけた」</p> <p>・「一人の男児が離れたところから「先生、ここにおいしい葉っぱあった。」と前の床を指差す。」</p> <p>・「みんなも、男児の傍に這って行って、食べる振りをする。」</p> <p>「おいしい、おいしい」</p> <p>・先生の後について、四つんばいで移動する。</p> <p>・「先生、こっちゃんにも大きい葉っぱがある。」</p> <p>・「りんごの葉っぱ」</p> <p>・先生について、「君の傍に這って移動する。」</p> <p>・1人の女児、「君に葉っぱを食べさせてあげ振りをする。」</p> <p>・みんなで「おいしい、おいしい」といいながら食べる。</p> <p>・近くの10人程が立ち上がり、先生と同様に木に登る振りをする。</p>
	⑫ (I) お腹いっぱいやからなあ。もししたら、H先生こっちゃんの葉っぱの方はまずいんじゃないかと思うけど、T君がさっきいつてくれたみたいに、こっちゃんに食べたらお腹いっぱいになってんで、またな、お腹すいたらこっちゃんの葉っぱも食べにくるでって教えてくれたんやなあ。	
	⑬ (I) 今日は、そんな毛いっぱいの毛虫さんになって、元気な葉っぱを食べようか。元気のない葉っぱを食べたら力つかへんからな元気の出るような葉っぱを探しに行つて、きれいな羽のちようちよになってみようか。	
	⑭ (動) 今日はどこに葉っぱを探しに行こうかなあ。いろんな草や木の生えているところを探しに行こう。	
	⑮ (動) さあ、どんな葉っぱが落ちているかなあ。（四つんばいになって動き回る）	
	⑯ (動個) A君はもう葉っぱ、見つけた？（両手両足を伸ばして、じっとしている男児のそばに寄って）	
	⑰ (動) 食べようか。（食べる振りをして）「これは甘くておいしいぞう」	
	⑱ (動個) K君はどっちの葉っぱを見つけたかな？ おいしいのあった？（座ったままでいる男児のそばに寄って）	
	⑲ (認) さくらの葉っぱ食べた？～そうかあ。	
	⑲ (動) そしたらバラ組さん、下の葉っぱあんまりおいしそうじゃないから櫻の葉っぱ食べに、木に登りに行こうか。	
	⑳ (認個) また見つけた？（「あった」と言った男児のそばに移動しながら）じゃ、それ食べてからにするわ。	
	㉑ (共) やっぱり下にもおいしい葉っぱあったんやなあ。（違う場所にいた子ども達のところへ移動しながら）やっぱり、おいしいね。（近くの子どもと食べる振り）	
	㉒ (認個) Aちゃんがねえ、りんごの葉っぱかなあ？ おいしいなあ。	
	㉓ (動個) J君（障害のある男児）にみかんの葉っぱもあげようか。（J児に近づいて）おいしいなあ。	
	㉔ (動) でも一回、櫻の木にも登ってみようか。みんなでな！木に登ってこよう。（立ち上がって両手両足で木に登る振りをする）	

<p>⑬ (動) 「登っていいこう。おいしい葉っぱが食べたいな」(リズミカルに歌うように言いながら、登る振り)</p> <p>⑭ (共) 「食べる振りをしながら、一緒に登ってきた子どもたち」(「おいしい? おいしいな」)</p> <p>⑮ (動) もっともつと上に登ろう。上まで登って、「はあ」疲れたけど、もつと上に登りたいなあ。もつと足と手を使って行くで〜 いっぱい登れるかなあ、よいしょ。(食べる振りをする)</p> <p>⑯ (共) やっぱ、上の葉っぱはおいしい。(食べる振りをする)</p> <p>⑰ (認) もっと上に見つけた?</p> <p>⑱ (動) もうちょっと上に登ってみよう。「おいしい葉っぱはどこかいなあ。」(リズミカルに歌うように言いながら、違う場所に移動する。)</p> <p>⑲ (共) 「おいしい」やっぱ、こっちの葉っぱはおいしいわ。(食べる振り)</p> <p>⑳ (共動) そっちにある?じゃそっちに探しに行こう!一緒にいねんで。(木に登る真似をして葉を食べる)</p>	<p>・全員が立ち上がって、登る振りをする。</p> <p>・「もつと足と手を使って」のことばに、動きが大きく速くなる。</p> <p>・「花がある」</p> <p>・「おいしい」と言いながら、葉っぱを友達にあげる振りが見られる。</p> <p>・「先生、こっちにも大きい葉っぱがある。」</p> <p>・枝の上を這っているつもりか、腹ばいになって動いている子もいる。</p>
<p>① (イ) あつ、みんな、お空に小鳥が飛んできた。どうしよう!</p> <p>② (認) 小鳥にうんこになってじっとかくれる?</p> <p>③ (動) 大変、小鳥に食べられちゃう! 「しーっ」</p>	<p>・「小鳥のうんこになる」</p> <p>・全員、小さくなって床に伏せて隠れる。</p> <p>・「もう、逃げた」</p>
<p>④ (イ) でもなんかなあ、葉っぱいっぱい食べたから、あんなに毛むくじやらだっただのに、だんだんどうなっていくの?</p> <p>⑤ (イ) だんだん毛が無くなって青虫になっていくんやな。でも、青虫さんいっぱい食べないと、ちようちよのきれいな羽になれへんなあ。</p> <p>⑥ (動) じゃ、青虫になってタンポポの葉っぱとか食べに行こうか。こっちにもおいしい葉っぱ探して、どんどん大きくなりたいとちようちよの羽はきれいにならないよ。こくらへんもおいしいなあ。</p> <p>⑦ (認) 変わった?</p> <p>⑧ (動) (T先生) おいしそうな青虫がいっぱいいるぞう。(ハチになって飛び回る)</p> <p>⑨ (認) よし、くさい臭いを出そう。(手で触角をつくり、くさい臭いを出す振りをする)</p> <p>⑩ (共認) (T先生) 何だ、この臭いは?くさい! (部屋の隅に退散する)</p> <p>⑪ (動) みんな、こっちこっち。このタンポポ畑にはハチがいた。</p> <p>⑫ (認) 何出した?みんな。</p> <p>⑬ (共認) くさいうんちみたいない臭い出したん?今度またハチがやってきたら、これでやってやろう。こんな武器があったら大丈夫やな。</p> <p>⑭ (動) (T先生) プーン。(ハチになって飛び回る) くさい、助けてくれ。</p> <p>⑮ (共認) ハチさん、どっか行った。おいでおいで。怖かったね〜。大変やったな。でも、ニョウって出す臭いのがあれば、きっと、ハチも飛んで行くわ。</p> <p>⑯ (認) (1人の男児がハチになっているのを見て) また、もつと違うお花の葉っぱを食べに行こうか。向こうまで食べに行こうか。(青虫になっている子どもたちを誘って、ハチの子と離れるように動く)</p> <p>⑰ (共) このも食べとこうかなあ。</p> <p>⑱ (動) (T先生) みんな、おいしい青虫を食べにやってきた。プーン。(ハチになって動き回る) くさい!</p> <p>⑲ (動) みんな、こっちこっち。今のうちだ。青虫君たち、こっちにおいで。</p>	<p>・「青虫」</p> <p>・四つんばいになって動き回る。時々、葉っぱを食べる振りをする。</p> <p>・「先生、みどりに変わった。」「青虫になった。」</p> <p>・「キヤー」小さくなってかくれる振りをするが、2・3人の女児が人差し指を頭上に立てて(触角のつもり)ハチに向かっていく。</p> <p>・すぐ、他の子も同じように触角をつくり、ハチを追いかけ</p> <p>る。</p> <p>・先生の周りに集まる。</p> <p>・「くさい、くさい」「うんち」</p> <p>・また、青虫になって這って動く。</p> <p>・一斉に触角を立てて、ハチめがけて追いかける。</p> <p>・先生に呼ばれて集まる。「ヤッター」「ヤッター」</p> <p>・「先生、僕ハチになりたい!」と言って、1人の男児が、ハチのように手を横で小さく振りながら、T先生の方へ行く。</p> <p>2人の子どもがそれに続く。</p> <p>・青虫の子はまた、葉っぱを食べたりしているが、ハチが気になる様子。</p> <p>・触角を立てて、ハチの男児たちを追いかける。</p> <p>・ハチになっていた男児たちも、「青虫君たち」ということばに、また青虫になって、集まる。</p>

(4) 青虫になる

<p>(5) さなぎになる</p>	<p>① (イ) でももう大丈夫。さあ、みんなおいで。いっぱいご飯たべてたら、もうすぐちようちよになれるんやったかなあ？</p> <p>② (イ) さなぎってどんな？</p> <p>③ (認) 固まるねんなあ。そこでしばらく休むんねんなあ。</p> <p>④ (動) でもな、みつばちのいる怖い野原だったら、休んでてされたらかなわんから、みつばちのこない安全な所探そうか。</p> <p>⑤ (イ) 葉っぱの多いところやったらええかなあ。</p> <p>⑥ (認個) いい場所みつけたなあ。(「君と傍にいる男児の頭をなでながら)</p> <p>⑦ (認グ) (立って青虫になっている女児のところへ行って) 葉っぱ見つけた？</p> <p>⑧ (動認グ) (うずくまったら、動かない子どもたちのへ) 固くなってさ！さなぎになってる！かちんこちんや。</p>	<p>・「さなぎになるんや。」</p> <p>・「かたまる。」</p> <p>・「葉っぱ見つけた」「大きいタンポポの葉っぱ」</p> <p>・青虫になって這うが、すぐ、じっと動かなくなる。小さく なあってうずくまってる。</p> <p>・女児が4・5人、立って青虫が木に登っている様子をして いる。</p> <p>・次々とうずくまり、からだを小さくする。 立ったまま、さなぎになった子も床にうずくまる。</p>
<p>(6) ちようになる</p>	<p>① (イ) 今ごろ、あの葉っぱはおかしかったなあとか、きれいな羽つくろうかなあとか考えてんのか。</p> <p>② (認) でも、そんなさなぎの殻から (ピアノを上向グリッサンドで弾き、殻から脱皮するようすを表す) きれいなちようちよ さんが・・・たくさん飛んでくる。</p> <p>③ (認個) (ピアノでちようが飛び回るような曲を弾きながら) 「ちやんの、羽を乾かしながら飛んでる。</p> <p>④ (動個) (転んだH君に) Hちゃんは羽強いから大丈夫やわ。いちゃんとか飛んでいけそう・・・</p> <p>⑤ (認) いろんなところにちようちよさんが、近くに飛んできて・・・</p> <p>⑥ (認個) D君そこで何してるの？蜜吸ってるの？</p> <p>⑦ (動) ようし、みんな、ちようちよになっってお花畑いっぱい飛んでいこう。行くよ。</p> <p>⑧ (動) こっちのお花畑も行こう。ここにはたくさんきれいな花が生えているから。</p> <p>⑨ (共) ここで蜜も吸おう。おいしい。ありがと。</p> <p>⑩ (共) (ちようちよの歌を初めだけ歌って) いろんなお花の蜜が吸えたかな？</p> <p>⑪ (認グ) あっ、こっちはずっとさっきから吸ってるのは、何味の蜜やった？</p> <p>⑫ (認) りんご味の蜜かあ。こっちははぶどう味の蜜もみつけたんかあ？</p> <p>⑬ (認個) 「君のは何味の蜜かなあ？ (「君に近づく)</p> <p>⑭ (認個) 紫のお花が咲いてんの？</p> <p>⑮ (動) ちようちよさん。きれいな羽になってるから飛んでるとこ見せてよ。いくよ。</p> <p>⑯ (動) (ピアノを弾きながら) きれいな羽で飛んで～</p> <p>⑰ (認個) (「先生) Eちゃんもきれい！</p> <p>⑱ (動) じゃ、お花のところで休憩しようか</p> <p>⑲ (認) おいしい蜜？</p> <p>⑳ (動) じゃ、今度はもっと遠いお花畑まで。それ～ (ピアノを弾きながら)</p>	<p>・1人の男児が立ち上がり、ゆっくり両手を動かして始める。 ・それを見て、次々立ち上がり、ちようになっって飛び始める。 ・少し飛んでは、床に両手両足を横に伸ばして伏せる。 ・また、飛び始める。 ・床に伏せて、休む。</p> <p>・全員、一斉にちようになっって、走りまわる。 ・小さくしゃがんだり、床に膝をつけてうずくまり、花の蜜 を吸うように床に口を近づける。 ・「見て、ここにお花が咲いてる」「おいしい蜜がある」な ど、口々に言いながら、あちこちに飛んでいっは蜜を吸 う動作を続ける。 ・先生やお友達に両手を差し出し、蜜を吸わせてあげる。 ・「りんご味！」「ぶどう味！」など、口々に言いながら蜜 を吸う動きをする。 ・一斉にちようになっって、両手を広げ上下に動かしながら走 る。</p> <p>・床に膝をつけてうずくまり、蜜を吸う。</p> <p>・また、一斉にちようになっって、速く走りまわる。</p>

言語カテゴリーの略は (イ) …イメージを想起させることば

(動) …動きを誘うことば

(共) …イメージを共有することば

(認) …イメージや動きを認めることば (個—個人にかけられたことばや動き)

グ—グループにかけられたことばや

表2 言語カテゴリーのマトリックス

場面	(1) 毛虫の話し				(2) 毛虫になる				(3) かくれる				(4) 青虫になる				(5) さなぎになる				(6) ちょうになる			
	イ	動	共	認	イ	動	共	認	イ	動	共	認	イ	動	共	認	イ	動	共	認	イ	動	共	認
①	○					○			○				○				○				○			
②				○		○		●						○										●
③				○		○			○					○										○個
④	○					○							○									○個		
⑤				○		○							T○											○
⑥	○							○					●											○個
⑦				○		○						T○										○		
⑧	○							●個						○										
⑨			○					○															○	
⑩	○							○個					○										○	
⑪								○個					○											○グ
⑫						○							○											○
⑬						○						●個												○個
⑭								○					○											○個
⑮						○							T○									○		
⑯								○					○									○		
⑰																								○個
⑱						○																○		
⑳						○																○		

(1) ①～⑳ は表1における保育者のことば(発語)の番号に該当する。

(2) ○…保育者のことば ●…子どもの自発的な動きを認める保育者のことば

(3) T…保育者Tのことば

個グ…個人やグループにかけられたことば

個

また、動きを誘うことばと認めることばが多く発せられているが、このような保育が動きの活動であることから動きへのことばが多いのは当然と言えるが、認めることばが多いところから、幼児のイメージや動きを認めながら進めている様子がうかがえる。共有することばが案外少ないが、これは発達段階を考えると、4歳児になると保育者が一緒に動く場面がやや少なくなることをあらわしているように思われる。3歳児まではほとんど保育者と幼児と一緒に動いて共有するイメージであそぶ場面が多いことは、既に前述した本学紀要でも報告しているが、その際にはことばもそれに伴って共有することばが多くなるだろうと推察される。

2、保育者の具体的なことばからみた身体表現活動（表1）

1）イメージ想起のことば（イ）について

身体表現活動においてイメージを想起することは最も重要な活動である。その際どのようなことばで誘っているかを見てみよう。（1）の場面では、実際の本の葉を見せている。こういった実物の提示はイメージを共有して確かなものとする上で効果的であると言えよう。穴のあいた葉から毛虫を連想させ、穴のあいていない葉とを比べてみて、葉の味やにおいについてイメージさせている（発語⑧⑨）。多分保育者はおいしい葉とそうでない葉にイメージを広げていきたい意図があったと思われるが、T児の「お腹いっぱいねん」という発言を認めて「またお腹すいたらこっちの葉もたべに来るでって教えてくれたんやな」と応答をしている。幼児の気持ちを大切にしながら、意図した「葉を探して食べる」活動へ導いていることがわかる。この場面での最後の発語⑩「元気な葉っぱを食べて、きれいな羽のちょうちょになろう」ということばは、この日の活動の目的をはっきりさせてはいるが、毛虫の導入としては不要であろう。（2）の場面以下にみられるイメージ想起のことばをあげてみると、（3）のかくれる場面では①「小鳥が飛んできた」、（4）の青虫になる場面では発語①「あんな毛むくじゃらだった体が、だんだんどうなっていくの?」、（5）のさなぎになる場面では発語①「いっぱいごはん食べてたらちょうちょになれるんやった?」、（6）のちょうちょになる場面では発語①「今ごろ、あの葉っぱおいしいかったとか、きれいな羽つくろうかなあと考えてんのかな」である。いずれも問いかけることばが主で、ことば数も少なく短い。しかし、すぐ幼児が反応し動いている。逆に、すぐ動き出しているからことばが短くなっているということでもある。それは、保育者と幼児でイメージするものが共有されているからである。それは、これまでの保育における保育者と幼児の遊び体験によるものに他ならない。このことについては、当日までの保育活動をあげて後述する。

2）動きを誘うことば（動）について

この保育実践で特徴的なのは、動きを誘うことばである。身体表現活動では一般に、よく「○○になろう」とか「○○になって動いてみよう」ということばかけがなされるが、この実践では一切それは見られない。（2）の場面では、発語①「今日はどこに葉っぱを探しに行こうかなあ」②「どんな葉っぱが落ちているかなあ」、（3）の場面では、③「大変、小鳥に食べられちゃう」、（4）の場面では、発語③「青虫さん、タンポポの葉っぱとか食べに行こうか」、（5）の場面では、発語④「みつばちのこない安全な場所探そうか」、（6）の場面では、発語②「きれいなちょうちょが飛んでくる」というように、もう子どもたちは毛虫や青虫やさなぎになっていることを前提にことばがかけられている。その時には、大部分の子どもは動きに入っているし、そうでない子どもも保育者のことばで動き

へのイメージがわいているはずである。このように直接「動きましょう」と言わなくても、イメージを想起させることばかけが十分に動きを誘うものであることを立証しているのである。

その後の幼児の動きへのことばも、あくまでイメージを大切にしたことばかけがなされている。(4)の場面で大きい動きを誘う時は発語③「いっぱい食べなきれいなちょうちょの羽にならへんなあ」、(6)の場面で飛び方の変化や大きく羽ばたく動きを誘う時は⑩「きれいな羽で飛んで〜」⑪「遠いお花畑まで、それ〜」などがみられる。いずれも、直接動き方を指図することばではなく、特に下線のことばは形容詞や形容動詞を使ってイメージを想起させているところにも注目したい。

3) イメージや動きを共有することば(共)について

ここでは動きを幼児と一緒にしながら発していることばが殆どで、「おいしいねえ」「葉っぱあった?」「怖かったねえ」「ここでみつも吸おう」「ありがとう」などのことばである。こういうことばは保育者から一方的なものでなく必ず幼児からも「先生、りんごの葉っぱ(ある)」「花もある」「こっちにも大きい葉っぱがある」などのことばが盛んに出ており、保育者に食べさす振りの動きも伴っている。子どもたちの自発的な表現活動が積極的に展開されている様子がうかがえる。幼児自らの表現を促すには、保育者と幼児の共有することばが大切であることを物語っているといえる。

4) イメージや動きを認めることば(認)について

前述の「共有することば」と「認めることば」はその働きにおいて共通するものであるが、ここで取り上げたいのは、イメージや動きを子どもに広めていきたい時に、この「認めることば」が使われていることである。(2)の場面で、発語⑥「さくらの葉っぱ食べた?」⑦「もっと上に見つけた?」はもっと他の葉っぱも見つける動きがしてほしい、もっと上にも登る動きをしてほしい、そのために誘うことばとして使われており、(4)の場面での発語④「(色が)変わった?」はみんなが青虫になってほしいために、発語⑨の「何出した?みんな」は触角をつくる動きをみんなで一斉にやりたいために発せられていると思われる。また、(6)の場面での発語⑩「おいしい蜜?」はちょうで飛んで花にとまる動作をさせたいために使われている。このように、子どもの動きを認めることばで、幼児全体を一斉の動きに誘っており、このようにみんなでする共通の活動の楽しさは、この時期に大切にされなければならないものであることを考えると、このような認めることばは大変重要であると思われる。

認めることばの二つ目の使われ方は、幼児の自発的な動きの時にそれを認めて発せられていることである。表1の「幼児の動きとことば」欄で下線を引いたところ(表2では●印を付けてあらわしたところ)である。(2)の場面では、保育者は木に登る動きに誘ったところが、1人の男児が「ここにおいしい葉っぱあった」と言って食べる振りを続けた。そのことばを聞いて、保育者はまだ下で葉っぱを探して食べる活動がやり足りないことに気づき、すぐに発語⑧「じゃ、それ食べてからにするわ」と言って他の子どもたちにも⑨「やっぱりまだ下にもおいしい葉っぱあったんやなあ」と言って食べる動きを続けるように誘っている。また(4)の場面では、2・3人の女児がすぐに触角をつくったのに気づき、発語⑥「よし、くさい臭いを出そう」と触角を出す動きにみんなを誘っている。その後、1人の男児が自発的に「僕ハチになりたい」と言ってT先生の傍に行ったのに気づいて、発語⑬「もっと違うお花の葉っぱを食べに行こうか」と他児を誘って青虫とハチの掛け合いの動きをもう

一度繰り返している。さらに（６）の場面では、１人の男児がすぐちようになって羽を動かし始めたのを見て、発語②「・・・さなぎの殻からきれいなちょうが・・・たくさん飛んでくる」ということばで急いでちょうの動きに誘っている。

三つ目の使われ方として、個人やグループが工夫した良い動きをした時に「認めることば」をかけている例がある。それは、（６）の場面の発語③「Ｔちゃんのは、羽を乾かしながら飛んでる」ということばは、羽にした手の動きを認めたことばかけである。（５）の場面のさなぎになっている動きに対して、発語⑧「かちんかちんや」ということばで固くなった様子を認めているが、これは他児にもさなぎになったら固くなることを伝えたい思いで発せられていると思われる。このように、幼児の自発的な動きを見逃さずすぐに認めて、丁寧にそれに対応していくことによって、幼児自らの動きが育てられていくのであり、このような「認めることば」の意義は大きいものがあるといえよう。

「認めることば」の四つ目の側面として、動きに入ってこない場合や動きが出ていない場合への誘いとして使われている例が見られる。（２）の場面の発語③「Ａ君は葉っぱ見つけた？」と⑤「Ｋ君はどっちの葉っぱ見つけたかな？」はじっと座ったままの男児にかけられ、（６）の場面の発語⑥「Ｄ君そこで何してるの？蜜すってるの？」⑬「Ｔ君のは何味の蜜かなあ？」も床に伏せて動かない男児にかけられている。（５）の場面の発語⑦「葉っぱ見つけた？」や（６）の場面の⑪「こっちは何味の蜜やった？」は動きが出てこない場合に発せられたものである。さらに、（２）の場面の発語⑪「Ｊ君にみかんの葉っぱあげようか」、（５）の場面の⑥「いい場所見つけたなあ」は障害のあるＪ君が動きに入れるように配慮したことばかけである。また、（６）の場面の発語④「Ｈちゃんは羽強いから大丈夫やわ」は転んでしまったＨ君にかけられた励ましのことばである。このように、全体の流れの中で、いつも個人の動きに配慮を怠らない様子が、これらのことばから窺われるのである。

さて、以上は保育者のことばを四つの言語カテゴリーに分け、カテゴリー毎に具体的なことばを拾うことによって、身体表現活動における保育者のことばの働きについて考えてみた。ここでもうひとつ考えてみなければならぬのは、ことばは話し手と受け手との間に共通のイメージがあってこそ、よりスムーズに伝達されるものである。保育においてこの共通のイメージとは、保育者と幼児の日々の生活と遊びで培われていくものであることは既に述べた。このことはこの保育実践でも、基本的に重要な要素である。この保育実践までの保育活動を見てみると次のようである。

	子どもの活動	様 子
4 / 12	◎ チョウチョ ○ 花畑に出かける ・ みつを吸う・かくれんぼ ・ 羽を休める ○ ハチに会う ・ 逃げ、隠れする ・ 葉っぱや石の陰で休む	身近にチョウチョを見ているせいか、イメージしやすい様で、「あんなあ、チューリップの花のみつ吸うねん」「いちご味のみつを飲もう」と色々な声が出る。反面、そのイメージには、個々にすごく差がある。
4 / 13	◎ 散歩 ○ 花摘み ○ チョウ探し	どんなところにチョウがよくいるのか探して歩く。

- 4 / 14 ◎ チューリップ
○保育士のチョウにみつを吸われる
- 4 / 20 ◎ ダンゴ虫
○土の中に隠れる
・えさを探しに地面に出る
○人間につかまる
・丸まる・隠れる・逃げる
- 4 / 24 ◎ チョウチョ
○いろんなところに飛んで探検する
・森の中・空の上・地面の近く
○強い風が吹く
・とばされない様にとぶ
・木や草につかまる
・じっと止まる
○敵が来たらどうするか考える
- 4 / 25 ◎ 誕生会でのクラスの出し物
○チョウチョ
- 5 / 1 ◎ タンポポ
○種から伸びる
○花を咲かせる
- 5 / 2 ◎ 散歩
○タンポポのわた毛とばし
- 5 / 8 ◎ チョウチョ
○卵から産まれる→青虫
・葉を食べて大きくなる
・木に登る、下りる
・小鳥が来ると、くさい臭いを出し逃げる
○さなぎ
・安全な所を見つける→チョウチョ
- 5 / 9 ◎ 遠足
○チョウチョ、ハチを見つける
○わた毛とばし
- 5 / 10 ◎ カエル
○オタマジャクシ
・泳ぐ・えさを探す
・泥にまみれる
○歌「オタマジャクシはカエルの子」
○カエル
・ジャンプ大会
・ヘビから逃げる
・草むら（ダンボール）で遊ぶ
- 5 / 12 ◎ タンポポ
○わた毛の種になる
○吹き飛ばされる（強い風、弱い風）

チョウにみつを吸われようと、手で大小の花びらを作り咲く。

つつかれると身を丸くするという動きがほとんどで、また、それを喜ぶ。ごっこ遊びをしたことで、次の日から、ダンゴ虫探しがさかんになる。

室内にハチがよく来ることもあり、ごっこの中でもハチを入れてみた。

保育士がハチになると、玉川、辰巳、濱はすぐに「ハチになる」と、加わる。チョウの子は、刺されないように逃げ回り、追いかけてこ状態になってしまった。

高司の対応について、もっと友達に任せることで、関わりをもたせたい。

「根っこから栄養を吸うから」と声をかけると、ぐっと足に力を入れている。

「タンポポとわた毛って一緒の花やの？」と少し疑問らしく、不思議そうにしている。

絵本、図鑑、紙芝居等で、チョウについて知る内に、その成長の過程にも興味を示す。

さなぎになることは、今いち理解できないようだが、青虫は普段も見せるせいか、葉を食べる動きをセッセとしている。くさい臭いを出すというのが楽しいようだ。

園外では、とにかくわた毛を探す。「フワフワ飛ぶなあ」とうれしそう。

「オタマジャクシに手と足が出たらカエルやで」とその関係はよく知っている。

カエルになると、何度もジャンプをして「○○ちゃん、こんな飛べんねん」と競い合う。

草むらを置くことで、高司もそこで隠れている。

みんなでわた毛とばしを何度もしたせいか、フワッと飛ぶイメージが共有できている。そこを認めると、張り切る。

5 / 13	◎ 散歩 ○オタマジャクシ、カエル探し	水辺や泥の中に住んでいることを知らせていく。見つからず、残念。
5 / 15	◎ 青虫、毛虫 ○おいしい草・葉を探す ○木に登る ・葉っぱにつかまりゆれる ○動き方を見合いっこする	「おいしい草の方が、体大きくなれるで」と探す。 毛虫も青虫も動きは同じだが、「大きくなったら、色が変わるねん」と話している。
5 / 16	◎ カエルを観察する ○えさ（みみず、くも、はえ）を探し、与える	とんだり、泳いだりする様子を間近で見ると、足の強さがよくわかる。それが、ごっこの動きへと加わってほしい。

この中で、ここで分析した保育活動と関連があるチョウの活動は、4月12日、13日、14日、24日、5月8日、15日の保育であるが、その他にも、ダンゴ虫、カエル、チューリップ、タンポポなどの表現活動が行われている。保育室の活動だけではなく、実際に散歩に行つてチョウチョやハチを見つけ、タンポポのわたげをとばし、ダンゴ虫で遊び、カエルを飼育して観察するなどさまざまな保育実践が行われている。見て触れて遊んだことが、さらに絵本・図鑑・紙芝居で確かめられ深められている。これらがイメージとして幼児の心の中に蓄えられファイルされていき、それがこの実践で保育者のことばから引き出され、身体表現として再現されているのである。その際、保育者が幼児とともにその活動を楽しみ共感をしあうこと、響きあうことばを共有することが重要な要素となっていることがわかるのである。

IV. おわりに

幼児の身体表現活動に、保育者のことばかけがどのように機能しているかについて、保育実践を通して考察してみた。順序として、まずイメージを想起することばかけがあり、ついで動きに誘うことばかけが続き、そのあと幼児と共感することばや幼児の動きを認めることばがかけられている。その際に使われていることばは、保育者が幼児とさまざまな遊びを共有し、その時の幼児の思いやそれから発せられることばに保育者が共感したことが、共にイメージとしてファイルされ、それが表現を誘うことばとして響きあって身体表現を引き出す働きをしていることが確認できたと思う。

今回の実践は、4歳児クラスの5月でありまだまだ3歳児期を抜け出していない幼児も多いことから、保育者はかなり多くの部分で幼児と一緒に動きを行っている。自らも動きながらことばかけをしているので、「動きを共有して共感することば」が多く発せられている。4歳児も後半になり5歳6歳と成長するにしたがって、保育者はことばのみでイメージをわかせる身体表現に導くことが可能となる。その際には「動きに誘うことば」や「動きを認めることば」が多く発せられ、そのことば自体を工夫することが必要になってくると思われる。例えば、「雪がふわふわ舞い降りてくる」表現を誘うことばとして「暖かい土の上ややわらかい草の上に降りるのかな」、また「大地にしっかり根を張った樹」を表現するときに「水も栄養もいっぱい吸い込んでるね」などのことばをかけて「ふわふわ」や「しっかり」ということばの具体的なイメージをわかせる工夫することによって、幼児の動きを質的に高め変化させることができる。しかしこのような場合に、幼児との遊びの共有による共通のイメージファイルが、さらに

必要で有効となることは言うまでもない。その上に、経験していないことも想像してイメージできるようになると、想像が創造を生み出し独自の表現へ発展する。保育者はそれを受けとめ認めていけるよう、自らのイメージ力を豊かに育てておかねばならないであろう。幼児と共に成長する保育者が標榜される所以である。このような豊かなイメージ力を育て、動きの質を高め変化させるために保育者がかけることばについては、今後の課題としたいと思う。

おわりに、この実践研究に多大な協力を賜った常葉保育園島山寿賀子園長、広陵西保育園宇都見三恵子園長、実践者・常葉保育園杉山智加子先生はじめ関係の先生方に、深甚の謝意を表するものである。



おいしい葉っぱを食べよう



くさい臭いでやっつける



遠くの花畑へとんでいこう

引用及び参考文献

- 三宅茂夫・田中亨胤 保育におけるコミュニケーション生成の改善 ― 誘因としての保育者の“ことばがけ” ― 保育学研究 第39巻第2号 日本保育学会 2001 p.49
- 中沢和子 イメージの誕生 ― 0歳からの行動観察 ― NHKブックス 日本放送協会 1979
- 藤善瑞子 幼児の「身体表現」の指導について ― 保育園での実践を通して ― Ⅱ 3歳児の身体表現からの考察 本学紀要 第30号 1999 p.11
- 藤善瑞子 幼児の「身体表現」の指導について ― 保育園での実践を通して ― Ⅲ 2歳児の身体表現と保育者の関わり 本学紀要 第31号 2000 p.63
- 藤善瑞子・村山真吾 幼児の「身体表現」の指導について ― 保育園での実践を通して ― Ⅳ 5歳児の身体表現とイメージの育ち 本学紀要 第32号 2001 p.1